

早乙女 貢

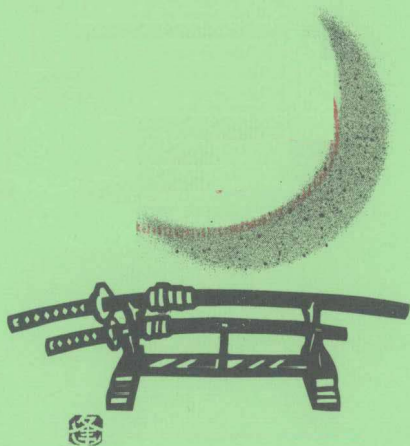
傑作時代小説

龍馬暗殺



龍馬暗殺

早乙女 貢



廣濟堂

龍馬暗殺

著 者 早乙女 貢

発行者 見田 清司

発行所 廣済堂出版

〒105 東京都港区芝2-23-13

電話 03(3453)1201(代)

振替 東京 8 - 164137

印刷所 株式会社 廣 済 堂

©1992 早乙女 貢

Printed in Japan

定価は、カバーに明示してあります。

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-331-05524-8 C0093

龍馬暗殺

龍馬暗殺 目次

龍馬暗殺	5
テロリスト	57
世良斬殺	107
第二奇兵隊	153
筑紫の志士	207
龍五郎切腹	255
狂爛	297

装幀 小宮山逢邦

龍馬暗殺

八月の半ば過ぎで、残暑の厳しさは、目が眩むほどであった。和歌山県の海岸といえ、蜜柑で有名だけに亜熱帯の氣候を感じるところだが、夏になると、殊に暑熱は耐え難かった。和歌山市の南郊に紀三井寺という由緒の古いお寺がある。真言宗で、本称は護国院だが、宝龜八年の開創というから、古い。西国三十三カ所の二番札所になっている。

ここは和歌浦の海岸から、すぐに山がそそり立っているので急な石段でも知られている。お遍路さんたちは、老人が多いので石段の真中に手すりがあり、それをつかんで、一段ずつ上ってくる。

そういうところだから、眺望は素晴らしい。楠だったか、数百年を経たと思われる巨木が根を張り、大枝をひろげて、真夏の陽を遮り、憩いの場をこしらえているのも、いかにも自然の摂理のようであった。

ここの山門と多宝塔は国宝だというが、本堂も重文になっているのではないかと思われる古びた莊嚴なものだ。

私のはるばるこの寺の二百数十段とかいう石段をのぼってきたのは、その国宝を鑑賞するためはなかった。

「当寺の塔頭で、滝ノ坊というのがあそうですが」

と、私は汗を拭いながら受付で聞いた。お線香を売っていた若い所化は、こころよく、腰をあげ

て、身を乗りだすようにして教えてくれた。

「氣イつかれへんやったかいな、その下でっせ。石段の途中から、こっちゃんに入ったとこどすさけ」

私は言われた通りに、また急な石段を降りた。傾斜の急な石段は、昇るよりも降りるときのほうが危険な感じがする。

なるほど、途中に、滝ノ坊と書かれているのが見えた。灼けつくような陽ざしの中を、汗を拭き拭き、昇っていたので、目に入らなかったらしい。

いまから二十年ほど前のことなのである。私も若かったが、世間もまだ静かだった。旅行ブームというのも起っていないかったし、こういうところにくるのは、善男善女ばかりでお遍路さんの一団とすれちがっても、南無遍照金剛……と低声に唱和しながらるのが好ましかった。

滝ノ坊を私が訪れたのは、ここに佐々木只三郎の墓があると聞いたからである。

佐々木只三郎は、会津藩家老手代木直右衛門の弟で、遠縁の旗本佐々木矢太夫の家を継いだが、もともと佐々木氏である。剣は精武流を学び、槍もまたよくした。

その事歴としては、幕末に講武所師範となり、新選組の前身たる三百人組の取締りとなって京へ往復し、転じて京都身廻組与頭くみがしらとなり、鳥羽伏見の戦いには、見廻組を率いて大いに奮闘し、山崎辺で傷ついて、この地へ逃れ、療治の甲斐もなく、数日後に歿みまかった。

幕府の密命を受けて清河八郎を、江戸赤羽橋に斬り、京では、坂本龍馬を斬ったことでも知られている。妻女がこの紀州藩士の家から出ているので、明治初年にこっそりと墓を建てた。滝ノ坊で

傷を養った由縁であらう。

滝ノ坊の住職に案内されて、裏山にのぼってゆくと、満山すさまじい蟬の声であった。藪蚊がぶんぶん飛び交い、陽あたりのいい斜面にその墓が建っていた。

墓地の一番奥まったところにある。二メートルばかりの泉州砂岩でできた墓石には、徳川家臣佐々木只三郎高城之墓、と読めた。

左側面には、慶応四年辰正月六日戦山□橋本中砲丸^{ほうがんにあたり}経二日没、とあった。建立者の名はない。右の側面に、宿坊 当山滝之坊、とあるだけである。

遺族の話によると、夫人がひそかに建てたものという。

徳川家ゆかりの者は明治初年、朝敵と目され、その遺族たちも迫害にあっている。こうした墓を建てるさえ、公然とはできなかったのであらう。

ただ、紀州にあるだけに、明治政府の目も届かなかったのではないか。

ここに佐々木只三郎の墓があることを教えてくれたのは、海草郡仁義^{にんぎ}の中学の校長先生であった。現在は下津中学になっているらしい。私は、佐々木只三郎の墓がこの紀南の地に在ることに、何か寂寥を感じた。かれが、どんなにか、江戸へ——あるいは会津へ、帰りたいかたのではないかと、思ったのである。

それから、十五年ほど経った。私はたまたま某社の文芸講演旅行で、和歌山県の新宮市を訪れる

ことになった。講演旅行は四泊五日であり、その初日が新宮で、次の日は十津川街道を下って奈良の橿原市にゆく。同行は評論家で文芸家協会理事長の山本健吉氏と作家の庄司薫氏だったが、その二日前に、私は主催者は別だが神戸で講演したので、その帰り紀南を一周して、新宮市で落合うこに会った。

実は、只三郎の墓をもう一度訪れたくなったのである。

懐しい滝ノ坊の裏山の墓地を訪れた私は、愕然とした。只三郎の墓は倒壊し、真っ二つに割れていた。

「いままで、百年も無事だったのが、突然倒れることがあるでしょうか」

和歌山市の知人は、こう言って首をひねった。墓地は南むきの斜面にあったが、只三郎の墓石は、山を背負っていて、風当りのはげしいところでない。むしろ、屏風を引きまわして囲ったような地形になっている。

「誰かが、倒した?……」

私は、憤りを^{おき}压えて言った。その人は、言い難そうに言った。

「このあたりでは、坂本龍馬の子孫か、土佐のゆかりのある人が、やったのではないかと」

「そんなに怨んでいるのだろうか。まさか……」

私は絶句した。地震や強風で倒れて欠けたというのではない。真っ二つになっているのが、不審

を感じさせたのである。

二

佐々木只三郎と今井信郎の間で、龍馬の話が出たのは、慶応三年十月十一日のことだった。

今井信郎は、その二日前、新たに見廻組に入ることになって上落してきたのである。二人は旗本同士であり、講武所師範に就いていたから、特に交遊はなかったが、旧知の仲だった。

「――坂本龍馬が、京に來ている」

と、只三郎は言った。

「坂本……」

「聞いたことがあるだろう。ないかな、江戸ではあまり知られていないが」

「土佐の男ですか」

「そうだ」

「噂では、ちょっと耳にしたことがあります。勝安房を斬ろうとしたところ、なんでも説得されたとか」

「らしいな」

「それくらいのことです。いなか者で乱暴者のようですな」

「いごっそ、だ」

「は？」

「土佐のいごっそ、肥後のもっこす」

只三郎はうたうように言い、にやりとした。信郎も笑いだした。江戸人の笑いだった。

「強情者のことですね、出羽でいうじよっぱりというのと同じようなものでしょうか」

「龍馬のやつは、土佐ではあだたぬやつ、といわれている」

これは信郎にはわからなかった。

「要するに、厄介者、というわけだ」

「なるほど」

「土佐で厄介者は、この国でも厄介者だ」

只三郎が何を言おうとするのか、信郎にもうすうすわかってきた。信郎は無言で、手酌を重ねた。京都という土地はいうまでもなく、千年王城の地だが、その複雑さは二ヶ月や三月滞在しても、容易には、事情をつかめまいと思った。

江戸とはあまりに違いすぎた。今井信郎は京都へ赴任するなどは、この春まで、夢にも思ったことがなかったのである。

青年のころ直心影流じしんかげりゅうを学んでいるが、その上達ぶりは三年にして免許を得、講武所師範代に任じられたということからみてもわかる。当時講武所とは、黒船来航以来の内憂外患に対処するに、あまり泰平の夢をむさぼりすぎた旗本御家人が安逸に流れ、時勢の急迫に気のつかぬ者が多いため、頭脳と武芸を鍛錬のために開設したものであった。

はじめは、幕府関係者だけの入所を許したが、しだいに、門戸を広げて、外様大名の家臣でも、

志ある者は、大いに奨励し、勉強させた。

徳川幕府といえ、その統制する大小名を親藩、譜代、外様に分けて論じられるのが一般的だが、江戸時代も後期になると、実際問題として、その区別はうすれてきている。將軍家との婚姻で縁戚関係になったところも多いし、幕府の諸制度が、近代化されてきていたのである。

文久三年に参勤交替の制が廃されたのも、そのもつとも大きな現象だが、これはもう実際には、^{すた}廃れていたも同然で、ただ明文化しただけにすぎない。

幕府の内部だけでも、従来の世襲制度がうやむやになり、人材登庸が、行われてきた。勝海舟なども、この人材登庸のことがなかったら、一生世に出ることなく、父親のように不平御家人として、埋もれてしまっていたわけだ。

幕末になって、討幕に狂奔した長州人たち桂小五郎や、高杉晋作や、土佐の坂本龍馬やその他の連中も、江戸では、北辰一刀流の千葉道場などでは、幕府の士と、同門に学んでいるのである。

だが、鎖国を解かざるを得ない状態になって、欧米先進文明国の思想や武器が流入してくるにしたがい、開港攘夷さわぎがエスカレートして、倒幕による回天の野望が、西国の外様藩の中に湧き起ってきたのだ。

長州毛利家がそれであり、薩摩の島津家がそれであった。かれらの内部では、凄まじい血で血を洗う闘争がくりかえされてきた。

藩内の保守派と急進派の殺し合いである。現代の表現を借りるならば、内ゲバであった。そこには、自らの思想と野望を達成するために、親兄弟をも殺戮してかえりみない、野蛮性が見

られる。

薩摩藩では、伏見寺田屋で奈良原喜八郎（のちの男爵、^{しげる}繁）が有馬新七らを斬り、長州では高杉晋作らによる棕梨藤太らとの殺しあいと、奇兵隊内における権力闘争が、多くの同志を殺した。土佐では、いわゆる勤皇派（坂本龍馬も加盟していた）たる武市半平太らによる執政吉田東洋の暗殺である。かれを斬った那須信吾らは、また、吉野で天誅組を挙兵し、五条代官所を焼討ちしたり殺戮をほしいままにして暴れまわっている。

殺戮が好きな南国人氣質と言つてしまえばそれまでだが、こうした気質と嗜好は、京都においても同じだった。

京都には天皇がいる。孝明天皇は、攘夷思想には、共鳴しているが、この攘夷は、ただ紅毛碧眼^{こうもうへきがん}を好きになれないという程度の一般論を出なかった。

ところが、板ばさみになって、開港条約に調印してしまった幕府を窮地に陥れるには天皇も攘夷ということにして、開港論の幕府を追い詰めるのが一番よかったのだ。

長州とそのシンパ諸国からの脱走浮浪の徒によつて、京都は、混乱させられた。

治安を悪くすれば、政府の責任になるのは今も昔も変りはない。もともと食い詰め者が天下の騒乱に乗じようとしての、『勤皇の志士』『攘夷の志士』を名乗ったのが^{すくな}少くない。

そう言つて、悲憤慷慨してみせれば、浮浪人たちはアンチ幕府の大名やその急進派には気にいられるのである。少なくとも三度の食事にはありつけるし、酒も飲める、小遣いも貰える、女も抱ける。ごろつきと同じだった。

明治になって、神奈川ごんれい権令になった土佐出身の大江卓の談話筆記に、白川陸援隊（龍馬とともに暗殺された中岡慎太郎を首領とする）の生活を述べたものがある。

市中におつては食うこともできぬので陸援隊に入ることになった……そこにおれば食うことは困らない。……それから夜は先斗町ばんとへ行つて遊ぶ。もとより（金を）払うつもりはない。……まあ飲みどく、食いどく、しどくというところだ……。

しどく、とは女を抱いてセックスする。売春婦を買つて、金を払わず、しどく、というのだから、ごろつきと同じだ。こういうのが勤皇の志士で通つた。明治の天下になるやそんな連中の生残りが大臣、参議と出世している。

先斗町のこれか、大阪の新町の「瓢」ひょうという茶屋で、海援隊のものが行く家がある。大阪や京都の茶屋の組織というのは、客に対する責任を仲居がいつさい負うている。金がとれなければ仲居が払わなければならぬ。先斗町の堀江の竹久という家のお久というのが、海援隊の掛りで、すっかり背負わされた。その家におれなくなつて困つて……当時、志士をひきうけていた仲居はみんなこんな目にあつたそうだ……。

仲居とは女中である。女に負担させて、飲んだり食ったり、女を抱いたり、それで一文も払わなというのだ。

こういう連中が、明治政府を作つたのだから、政界汚職は当たり前かもしれない。そのうえ、京都の市中攪乱を工作して、むやみと人を斬る。放火、掠奪、強請等々、ろくなことはしなかった。